

よぎる戦時 憂う県民

■政府、当時の大本營のよう ■国の針路 誤らないでほしい

安全保障関連法案をめぐる混迷を、戦争を体験した県民はぞつ見たのか。それぞれの70年前の記憶を思い起こしながら、「平和や憲法が守られるのか」と誓鐘を鳴らした。(西脇和宏)

平和守られるのか

大江喜久夫さん(87)「小浜市」は戦時中、陸軍の少年飛行兵として特攻隊の中継基地にいた。多くの隊員を食せり、「あんたにも頼むぞ」と言われていたことが忘れられない。日本が危機に陥った場合の備えとして、法整備の必要性は分かる。が、一抹の不安はある。「戦争が好き、戦争をした」といふ人は一人もいない。安倍さんが戦争をやるとも思わない。ただ、法が成立した後も、「戦争をしないと」といふこと(を)すつと踏襲していけるのか。その時々々の解釈でどうなるか分からない。取り締まりの対象が徐々に広がり、敵国化されていった治安維持法が頭をよぎる。

終戦直前に満州(現中国東北部)にいた山田忠篤さん(82)「福井市」は、旧ソ連の参戦による逃難行の中で母と祖母、生きたばかりの弟を失った。「軍部は早い段階で旧ソ連に働きかけたのに、開拓民らには何も知らされなかった。一番おぼえな思っているのは一般の国民」と振り返る。安保法案の議論に「憲法違反といわれる法律を無理やり通す姿勢では、当時の大本營のように政府は何を隠しているか分からない。戦争に巻き込まれるのを感じると憤った。

「政府は(法案によって)戦争にはならないと言いが、(他国軍の)後方支援をするとなれば敵国とみなされて、やじはを向けられる危険がある」と語るのは、7歳で福井空襲に遭った大野勉さん(78)「同市」。焼夷弾が隣の家に落ちた中を逃げ惑った「こ

つ死んでもおかしくない体験」と強調した。県遺族連合会の久谷清邦会長(81)「坂井市」は、会員間では意見が分かれていて賛否は場からも「将来のある若い人」を絶対に戦場に出したくない上で、「私た近遺族のよつな

つらい思いを繰り返さないように、国の針路を誤らないでほしい」と訴えた。

9/1 福#